

初任給のバラ

坂井 和代 石川県野々市 五十四歳

「今ヒマ？」今年地元の大学を卒業した次男が声をかけてきた。県外に就職。連休に帰省してきた。「初任給もらったけど何か欲しいものある？」と。あれこれ考えて以前から一度育ててみたいと思っていたつるバラの苗を所望する事にした。お店の中で悩んで一緒に選んでくれたのは平和という名のバラの大苗と白雪姫の名のバラの新苗。

新苗を育てるのは難しい、赤ちゃんを育てるみたいに気をつかうと本に書いてあった。太陽の向き、当たる時間。風。土の配合。水やり。育児書を読むようにバラの育て方の本を何冊も読む。買ったばかりの苗を前にオロオロとする。次男が産まれた頃を思い出す。肺に水が溜まって産まれた次男は「すぐ入院です。今晚が峠です。」と言われた。保育器の穴から手を入れる。小さな小さな指がギュツとつかんできた。元気に育ちますようにという思いで読んだ育児書は心配の余り涙で字がかすんで読めない時もあった。嵐のような子育てを終え、主を失った子供部屋はガランとした。空の巣症候群なのか夕方になると庭に出て花を見たくなくなる。手入れをしていると時間がゆったりと進む気持ちになる。次男がくれたバラは庭に植えてから少し背が伸びた。子供の成長に一喜一憂していた頃を思い出す。「元氣？」次男の代わりにバラに声をかける。返事はない。ただそこにいるだけでいい。必要としてくれる存在があるというだけで生きるパワーと安らぎと癒しをもらっている。